

あけましておめでとうございます。二〇一六年を迎えまして、今年初めての正信偈講座であります。大変、暖冬で、穏やかな天候に恵まれて、こうして皆様方と一緒に親鸞聖人の「正信偈」を学ばしていただくことを心から感謝申し上げる次第であります。

先程お話を伺いましたが、ご住職様ご自身が親鸞聖人の教えに出会い、どこまでも普遍なる真実に立って、大事な問題（アマゾンのお坊さん便）について見解を表明されておられますことを、大変有り難く存するのであります。日本だけではなく、ニューヨークの方からコメントを求められているとのことで。世界的な規模で活躍されておるといことは非常に尊いことであると思います。

親鸞聖人が表されました浄土真宗のおみのりも、日本だけに留まるものではありません。十方衆生、世界に生きておられる人々に、「響きは深し」という願い。世界のいかなる所であろうとも、それが響けば頷かずにはおれない。そういうおみのりを開顕しておられることを改めて思うのであります。

今の時代は大変厳しい。北朝鮮では水爆実験を行ったという表明をしました。世界情勢を考えましても、やはり核軍備ということが大国においてなされておるのであります。私共、仏法の教えに出遇わせていただきますと、やはり地球全体が、非常に深い闇を抱えているのではないかと知らされるのであります。今日、学ばせていただくところは阿弥陀の光ということを讃えられておるのであります。その光に遇うことにおいて闇の深さが知らされる。

初めに、今日の範囲になっておりますところをご一緒に拝読させていただきたいと思ひます。このテキストの六頁の、「普放無量無辺光」から「一切群生蒙光照」まで、ご一緒に拝読させていただきたいと思ひます。

普放無量無辺光 無碍無対光炎王

あなたの名は、この世界の至るところにあまねく光を放ち、  
はかりなく、果てしなく、さまたげなく、比べるものなく、  
炎のように燃えて、

清浄歓喜智慧光 不断難思無称光

清浄（しょうじょう）な、身心に満ちるよろこびとなり、  
真の智慧を輝かせ、絶えることなく、  
思いや言葉でたたえ尽くせない光が、

超日月光照塵刹 一切群生蒙光照

日月よりも明るく、世界のすみずみまで照らします。  
すべてのいのちが、その光の恩恵をこうむっています。

どうも、ありがとうございました。この「正信偈」は、南無阿弥陀仏の用（はたら）きが真実の行であり、浄土から開かれ浄土に至る行であって、すべての人々の上に開かれているということをお讃えられる、『教行信証』の行巻の最後に歌われておる讃歌であります。

本願念仏の仏道が開顕されたという大いなる感動と、喜び。そしてその大いなる仏道が、インド・中国・日本と三国七高僧によって伝えられてきた。この身親鸞にまでということが深い感動としてあります。この身親鸞にまでということは、単なる個人ではなく、その時代に生きるすべての人々

の上に伝統されてきた仏道であるという感動が表現されておるのであります。そういう仏道に私共も現代という時代の中で、様々な問題、苦悩を抱えている身が出遇わせていただくという意味があるのです。

今日は年頭ということで私自身が感じたこととして、実は八十歳と九日になりました。今まではお年寄りという自分のではないと思っていたのですけれども、然にあらざと。昨年ちょっと身体の調子を悪くしまして、そのことを通して申し分のない年寄りであるということを教えられつつあるのです。若い時はお年寄りということを行いながら、やっぱり無意識の内に遠くに見ていたものが、そうではないと。「生かされて生きる尊さ」を感じます。

生かされて生きるという。どうしても元気である時は自分が生きている、自分で生きているのだという風に思ってしまう。自分が生きるということと言っても、そこには生かされて生きておるといふ事実があるわけでございます。生きているということは吐く息、吸う息の呼吸があります。身体の中には血管が通って脈拍を打っております。体中の血管は地球二周ぐらいの長さがあるそうです。思いも及ばない命のはたらきということがあって、生きているという事実があるのであります。

それはどの人にとっても平等な事実であります。生かされて生きている命の尊さ。やはり仏法に出遇うというところに生かされているのだということが教えられてくるということがございます。それは真に尊いことでもあります。何故尊いかと言うならば、生きることに於いて、人間が人間になる、目覚めた人間になるという。それを仏弟子と。人間であるという事実を立て、人間になるという。そういう大きな方向性を与えられる。そこに不可思議の事実という。不可思議というのは、人間が思い量ることができないような、そういう大いなる事実だと思えますね。

そしてそれはまた厳粛なる、尊厳なる、そういう事実である。それは状況を問わないと思えますね。社会的に言って成功した人もあれば失敗した人もある。傷ついた人もあれば、色んな問題を抱えている人もある。こんな長生きするのではなかったと思う人もあるかもしれない。どのような状況でありましても、生かされて生きておるといふこの尊さということに気が付くならば、私は厳粛にして、尊厳である。そしてそれは大いなる事実でないかということをお教えられつつあるのであります。これは日本人だけじゃない、およそ人間であるならば、ということではありませんか。

親鸞聖人は、そういう人間であるということ、国を超え、民族を超え、あらゆる状況を超えて、あらゆる状況の中に生きる人間に呼びかけて止まない。そういうことを教えておられるのだなということをお年頭に於いて改めて思うことでもあります。

坂村真民（さかむらしんみん）さんという方が、もう亡くなられましたが、九十七歳まで生きられた詩人でありまして。坂村真民さんが『念ずれば花開く』という詩集を出されました。人に遇い、法に遇うということが本当に大事なことであるということをお歌に表現された方です。

その坂村真民さんのお話をかつてもう四、五十年前になりますが、お聞きしたことがあります。大変情熱的な方でありました。その坂村真民さんの言葉の中に、「歳を取ることは良いことだ。取ってみなければわからない世界が開けていく。」という言葉がありまして、今日は若い方々もたくさんいらっしやって、実感については個人差がおありになるだろうと思うのですけれども、歳を取ることは良いことだと。良いことだということをお言いうことがね、並大抵じゃないと思うのですよ。それは色んな状況がありますからね。取ってみなければわからない世界が開けてくる。それはその通りだと思います。必ずしも人間の煩悩の感情で願ったような歳の取り方ができるとは限らない。そういう保障もない。

九十六歳までご長命でありました曾我量深という方が、「聴聞、聞法ということに志をかけて生きていかれるならば、毫碌するということはありませんわ」ということをおっしゃったことが、私には強い印象となって残っておるのであります。やっぱりそういう聴聞ということに志をかけて生

きるということは、精神生活のみならず、肉体的にも大きな影響を与えるということが、先輩の方々が紛れもない事実として証明してくださっておることでもあります。

したがって、同じように八十、九十と歳を重ねていっても、明るい老人と暗い老人とあるわけです。愚痴ばかり言っている老人とね、こういう身体になったけれども、こういう身体になってみなければわからないことがあるのですねと。こういう身体になってみて、先立って行かれた方々のご苦勞が少しずつわかってきますよということですね。そこには出遇いということが、一様じゃないのですね。

出遇いということは、たまたま出遇うのです。大いなるものに遇う。尊いものに出遇うというそういう意味があります。それは若い時だけですか。社会的に活動している時だけですか。命をいただいて、呼吸が止まる、息が終わる、脈が止まる。その命をいただいておる。私は命をいただいている限り、現役であると思います。

勿論、一般的な、常識的な概念ではそういうことは言いません。しかし私たちが先程「正信偈」をご一緒にお勤めさせていただきました。「帰命無量寿如来 南無不可思議光」という念仏ですね、量り知れない命。不可思議な光の如来に帰依するということが私自身の上で起こるならば、全生涯が念仏の中の人生。念仏に生きる人生として現役である。本人には仮に意識がなくなっても、私は人間として現役であるという風に思います。勿論、私たちは、いつまでも意識自覚があるということをお願いしますが、縁ということは、人間の都合の通りにはならない。縁を生きるということは縁を離れて人間の生活はないのです。肉体をいただいたということも深い縁であります。その縁を生きるということは、私は成り行く事実には任せる。任せられるということでもあります。成り行く事実には任せる。

精進して励んできて、三浦雄一郎（みうらゆういちろう）さんみたいに八十歳でエベレストに登られる方もありますし、それどころか亡くなってしまうということもあります。人それぞれであります。そこでこの縁を生きるということは、成り行く事実には身を任せる。それ以外には有り得ない。

それ以外には有り得ないと申しましたのは、上手くいった場合には自分がやったとして驕ります。予想外の場合には恨みます。自分を恨んだり、世の中を恨んだり。人間の特異な技なのですね。それこそかけがえのない一人ひとりの尊い人生でありますから、私たちが親鸞聖人に遇い、この「正信偈」を毎日いただくということにおいて、真に尊い人生をいただいでいくと。日々の生活が本当に大事なのだというようなことを教えられていくという意味があるかと思います。

先程、拝読いたしました「正信偈」の中に入りますと、「普放無量無辺光 無碍無对光炎王 清浄歡喜智慧光 不断難思無称光 超日月光照塵刹 一切群生蒙光照」。ここには、阿弥陀の名が無量光、無辺光、無碍光、無对光、光炎王、清浄光、歡喜光、智慧光、不断光、難思光、無称光、超日月光という十二光の名前として讃えられております。親鸞聖人は『大無量寿経』の教えによって讃えられておるのであります。法蔵菩薩が本願を起こして、五劫の間、思惟をして、無限なる修行を重ねて阿弥陀仏となったと。その阿弥陀の量り知れない用きは、無量無辺無碍光というような十二の光の徳で讃嘆される。そういう本当にこうスケールの大きい感動の表現であります。

この「正信偈」でいただきましたとしても、初めに「帰命無量寿如来 南無不可思議光」という念仏から、帰敬から始まっている。これはもう私たちの人生においては本当に真の依り処。帰すべき世界、生きる依り処ですね。それから命終わっていく、生死の依り処。人生全体が、清沢先生の言葉で言えば「乗托できる」と。任せられる。やっぱり任せられない時に七転八倒するのですね。七転八倒して傷付いてなお、恨みが残るということじゃないでしょうか。それが自我の自我心の闘争が破れば、乗托という世界に開かれていくわけです。

私たちは、どうでもいいようなことについては執念深く覚えているけど、大事なことについては

すぐ忘れると。だいたいお母さんのお腹から産まれてきたということは、計画しましたか。全面的な受動ですよ。それは安易な仕事じゃないのです。命がけの仕事です。全面的な受動です。それを受ける所から本当に生きるという。能動、本当に生きると、生かされて生きるというような本当の能動ですね。能動性が起こらなければ、運命論になるのです。まあ荒っぽい言い方をしますと、なるようになっておったというような。諦め。幸運を祝うというようなことになるわけです。

ここに悪戦苦闘があるわけです。仏陀釈尊を初めとして、浄土真宗の祖師方は、皆そうです。親鸞聖人もやはり悪戦苦闘の求道生活をなされた。ご承知のように二十九歳の時に法然上人に出遇っておられるのであります。そういう苦悩ということがいかに大事であるかということをお教えられるのであります。

「正信偈」はまず「帰命無量寿如来 南無不可思議光」という所から始まって、そして法蔵菩薩が本願を起こされるということを簡潔な言葉で述べられています。そして六頁のところでは、前回学びました「重誓名声聞十方」。この言葉が非常に重い意味を持った言葉なのであります。重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと、という。名声ということは、南無阿弥陀仏の名号が十方世界の生きとし生けるものに聞こえるようにということを本願において願われている。そして本願がを起こされるということは、人間の深い苦悩の現実。救いのないような現実を立て、そこから本当に人間が人間であると、目覚めた存在となれということを誓われている。

したがって、本願の第一願には、たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ。地獄・餓鬼・畜生ということは、三悪道であります。これはもう古い時代から説かれてきておりますが、単に古い話という問題じゃないのです。人間が生きておる所、そこに地獄あり、餓鬼あり。先程の北朝鮮のことを言いましたが、水爆を作ったと言って国中が喝采しているというのはおかしい話ですよ。原爆に何十倍、何百倍する人殺しの道具を作って喜ぶというのはどういうことですか。これが北朝鮮だけの問題じゃありませんよ。およそ、人間が生きておるところにそういう問題がある。

阿弥陀の本願の世界では、仏様の世界では、兵戈無用（ひょうがむよう）。殺し合いの道具となる兵隊も武器も無用であります。これは単なる理想という話ではないのですよ。人間存在の中心からの、一番深い所からの願いなのです。難しいことを言っておるのではありません。

私の一番上の兄は、戦死いたしました。遺族から言うならば、こんな大事な命が何故無惨にも殺されなければならないのか。絶対にあってはならないと。それが悲しみの中からの叫びでしょう。他人事ならば勲章をあげたりするわけですよ。兵戈無用ということは、あらゆる人間存在の根本の根底からの願いである。そういうことを、しっかりと私たち自身が腹の底に聞かなきゃならないことだと思います。それがないと理想になる。甘い理想なんかじゃありませんよ。命をいただいて生きるならば、およそ自分自身もむざむざと殺されたくない。関わるものを殺されたくない。殺すということについても、我が身のことを思えば罪悪であるということが痛烈に感じられるのであります。

だからこの地獄・餓鬼・畜生は実存関係ですね。現実に存在しているところに起こる感覚。それは地獄・餓鬼・畜生の痛苦ですね。前回の時に、太平洋戦争の中で飢えて、本当に生きようという時に食べるものが何もないということで自分の傷付いたところに湧いたウジ虫を食べて命を繋いだということを紹介しました。餓鬼ということは痛苦ですね。人間が人間であることを失う。地獄も殺し合いであります。畜生も、人間が童僕とされることでもあります。もの、あるいは力の奴隷になるようなこととございます。

だからそういう実存感覚。痛みや苦しみというものを抜きにしては、人間は生きられない。どんなに喜びがあっても、壊れる時があると。また自分は仮に喜びの中に命終わったとしてもその人を

悲しむ、悼むということがある。人間は単なる個人ではありません。人間の関わりも、交わりも、命の深い連帯を生きる存在であります。そういうことに気が付くということがなかなか容易ではない。

ここに今日学びますところは、本願が建立され、念仏が開かれて、あらゆる人々の上に念仏を称えることのできる道ということが開かれる。そこに普放無量無辺光という阿弥陀の光が、ありとあらゆる現実に応じて、量り知れない力、用きを持って、述べられている。

私はこの一段を学びます時に、親鸞聖人が『教行信証』の始めの総序の中で、「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船」。阿弥陀の本願が難度海。阿弥陀の難思の弘誓というのは人間の思いを超えた、真実のすべての人々を救い遂げなければやまないという誓いです。それが難度海。難度海という言葉聞いて、どう思いますか。人様のことですか。自分もその中にあるということですか。私はそういう感覚が大事だと思うのですね。「難思の弘誓は難度海を度する大船」。多くの場合、善人は難度海が自分以外になっているということが多いのではないですか。難度海というそういう痛み悲しみの自覚ですね。地球全体を見てもそうじゃないですか。難度海じゃないですか。本当の幸せと言ってもなかなか容易でない。

そして、「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」。その難思の弘誓から開かれた実現した無碍の光明。そこには念仏があるわけですが。無碍の光明は無明の闇を破する恵日であると。真実の智慧の光であると。そういう『教行信証』の序の第一行に、「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。」というところから始まりますね。あそこに無明の闇を破するという。これがいかに大事な意味があるかということなのです。

それにつきまして、先程、三悪道ということで地獄・餓鬼・畜生の人間ということで申しました。こう闇が自分自身に無関係ではないという。闇を抱えておる存在なのだということに気が付くということが私は非常に大事なことであると思います。大事なことであると申しましたが、生きていけば、そこに闇を感じざるを得ないという意味であると思いますね。

これはあまり良い例ではありませんけれども、昔は貧乏人の子沢山とって、たくさん子供がいて、十郎とか九郎とかというそういう名前の付いた子供さんもいたわけですが。そうなりますと、親としてはみんな平等に大事な子供だと思ってもね、現実にはついつい末っ子が可愛いと。そういう差別した意識がなくても、現実には差別になっているというふうな問題があるわけです。それはこの親の子供に対する愛情は変わらないにしても、事実としては匙加減と言いますかね。そういう悲しいかな、人間の煩惱がはたらくと。良い子は可愛いけど反抗する奴はそれ程でもないというようなね。やっぱり極めて平凡な人間の生活の中に闇を持っている。その闇に気が付かない。

愛しているという意識の中で、いくら愛していると言っても、受ける方で愛情が感じられなければ愛していることにならないということがあるのではないですか。これが人間の厳しい事実ですね。やっぱり先程言いました、人間というのは自他の関わりを生きるわけですから。いくらこうして愛しているのだと仮に言ったとしても、それが相手に伝わらなければ愛したことにはならない。色んな経歴を経て、ああそうだったのかと、気が付くとね、ああ親の愛情というのは変わらなかったのだなということに気が付くわけですけど。既に親の愛情の中にあっても、気が付くということがなければ、ないが如しと。これが人間の生活というものではないでしょうか。

闇の深さということにつきまして、戦時中は灯火管制が厳しいということがあって、外灯なんか勿論ありません。電灯も覆いをしてね、送電時間の制限があったかと思えます。真っ暗闇なのです。漆黒という言葉がありますが、漆黒の闇。真っ黒の漆を塗ったような真っ暗。全く光がない。現代の人々はあまり漆黒の闇という体験がないのではないのでしょうかね。本当に真っ暗なのです。それはもう恐ろしいという言葉がふさわしいような闇ですよ。その闇の怖さ、恐ろしさ、そ

ういうものを、私は現代人の多くは忘れ果てているということが言えるのではないかと思うのですね。

そういう漆黒の闇の中で蠟燭一本がね、マッチを擦った光がね、マッチも代用品がありましてね。それからカンテラ。カンテラってわかりますか。もうこういう言葉は死語になっているかも知りませんが。壺の中に、ガラスとかブリキの。石油を入れてですね、そして火をつけて燃やすという。カンテラというものがね、なくてはならない道具だったのですよ。それから蠟燭の火とか。そういうものがパッと点くとね、家族が浮かぶとかね。そういうたとえ防空壕の中に避難していてもカンテラの火が点くとそういう人間の姿がね、浮かび上がる。

何が言いたいかという、無明。真っ暗の闇では自分も見えない、人も見えないということなのです。光ということが、なくてはならない用きだということ。光があるところに自分が知らされ、人様が知らされ、環境が知らされる。人間の姿が知らされる。これは太平洋戦争中ですがね、やはり統制ということがありましてね。まあ食べ物が全く不十分でありました。食べられるものなら何でも食べた。ネズミでも犬でも猫でも。道端に生えておる雑草でもね、食べたということがあります。

それと統制は食べ物だけではありません。知識の統制ですね。英語なんかは敵国語なんてことで、ベースボールなんて言うなって。それでこの外国を、日本と同盟を結んでいない国を讃嘆なんかできないわけですよ。非国民となるわけですからね。日本人じゃないということですよ。これは厳しいですね。これもまた闇ですね。人間の権力。そういうものによって、統制して人間を奪っていく。そういう闇であると思います。そういったものが強烈であります。

だから人間の歴史は古いのでありますけれども、近々、百年以内のことを考えたらね、やっぱり人間が人間を殺し合うだけじゃなくて、人間を失うという、人を見失うというそういう闇が非常に深いということがあられるわけですよ。現代には現代の文明の闇があります。そして人間の孤独ということはいよいよ私は深いものがあると思われてなりません、どうでしょうか。スマホや色々、ITの機器は行き渡っておるのであります、一人ひとりの生き死にとか孤独と言う問題について本当に自覚にまで至っているかという、便利性あるいは利便性の中に妥協して。まあ妥協というのは悪い言葉ですが。痛烈な言葉で言えば飲み込まれて、大事な命の瞬間、瞬間を収奪されてないかという。

例えばテレビも何チャンネルもありまして、探していけば二十四時間テレビを観てもきりがなくらいなのですが。しかし笑ったり泣いたりして観ていて終わった後、何が残ったかということになる。まあ余程大事な番組に遇うと違うでしょうが、要するに時間を収奪されただけじゃないかということになる。文明の利器が、本当にかげがえのない自分自身に向かうという。自己自身を問うというそういう人間にとって大事な問題が、文明の利器に奪い去られていくということが起こりかねないですよ。ことによったら政治家なんかの上手い言葉に騙されやすいと。ごまかされやすいというそういう問題もなきにしもあらずということでございます。

やっぱり私は思うのであります、政治家の方々のご苦労はあるでしょうが、やっぱり人間であることの生きることの本当の痛烈な痛み悲しみを感じてそこから立っておられるかどうかということは、私は大問題であると思います。それは人々を数によって利用するという魂胆と、自分一人が本当に目覚めなければ、人々の目覚めということは、おぼつかないのだという。そういう根本的な問題に気が付くか気が付かないかということは大きな問題であろうと思うのであります。そこに私たちにとって、この生きるということは闇の深さを知らされるということと同時に、本当に光に遇うということが待たれているということでもあります。

闇深くして光いよいよ明るし。闇の深い所に光が本当に光として。光ということは明るさであり

ます。本当の智慧ですね。人間のいわゆる常識的な利害打算の知識を超えて。闇ということは、無明であります。本当の無智ですね。無智ということは、知っているという意識に立つことなのですね。あんたのことを知っていますと言っているけど、本当に深い悲しみもあれ、言葉が届かないということがしばしばあるわけです。だから闇というのは何も知らないということだけじゃないですよ。知っているという、存知しているという。よくわかっているのですよということが。

それが学校の先生と子供たちの間でもあるわけです。何々君のことはよくわかっている、こういう子供でしょう。親から見ると、いや、そうじゃないですねと。子供は悩んでいますね、というようにことがしばしばあるわけです。だから本当に出会うということは大問題ですね。そこに光ということが、光明ということが言われるわけですね。普く無量無辺光、無碍無対光炎王、清浄歓喜智慧光、不断難思光、超日月光を放って塵刹を照らすという。普く放つということは、平等に一切の人々の上に光を放つということですね。

お手元に資料として配布していただきましたが、これは親鸞聖人が、曇鸞大師が阿弥陀の徳を讃えるということを大変感動的に歌われた、讃阿弥陀仏偈。この偈の中に十二光についても讃嘆されているのです。

智慧の光明はかりなし  
有量の諸相ことごとく  
光暁かふらぬものはなし  
眞實明に帰命せよ

これは無量光を讃えているわけですね。これ、思い出すでしょ、先程お勤めしましたね。

弥陀成仏のこのかたは  
いまに十劫をへたまえり  
法身の光輪きわもなく  
世の盲冥をてらすなり

その次に智慧の光明はかりなしというご和讃。これは阿弥陀の十二光の中の無量光を讃えた和讃です。これはコピーいたしましたのは名畑応順という先生。今はもう命終しておられるのですが、かつて大谷大学の学長も務めた方なのです。その方の親鸞聖人の和讃集につきましたの校注をしておられる。その名畑先生の本からコピーをさせていただきました。大変懇切に語注なんか解説されております。ちょっと読みづらいかも知れませんが、大変参考になる、親鸞聖人がどのように歌われておるのかということもいただいでいくことができると思います。

例えばですね、

智慧の光明はかりなし  
有量の諸相ことごとく  
光暁かふらぬものはなし  
眞實明に帰命せよ

その眞實明ということについて、真といふは偽り諂らはぬを真をいふ。実といふは必ずものの実となるをいふなり。これは親鸞聖人がつけられた注釈なのですね。眞実ということは偽り諂いが無い、

実というは必ずものの実となる。ものの実となる衆生の実ですね。衆生のということは、端的に言えば、私自身に用くということ。それから真実ということはどこに用くかということ、私自身の中に用くという。これはいわゆる概念的な理解とは雲泥の違いなのです。単なる解釈じゃないのですね。

解脱の光輪きはもなし  
光触かふるものはみな  
有無をはなるとのべたまふ  
平等覚に帰命せよ

これは無辺光ですね。阿弥陀の光に遇ったものは有無をはなるという。これも人間にとっても有ることに対する執着、無いことに対する執着。有無ということほどだけ深い人間関心かわかりません。そういうものを超えて、平等な命の本当に平等なる用き、尊さに気付くということですね。平等覚に帰命する。平等ということは、私は人間の生活が仏智、如来の光明、如来の大悲に触れて初めて平等覚ということが領けるものだと思いますね。

それから

光雲無碍如虚空  
一切の有碍にさはりなし  
光澤かふらぬものぞなき  
難思議を帰命せよ

これは無碍光を讃えているのです。この和讃、和讃だけじゃありませんが、この読んでいくときの一つのポイントとして、私たちに実感を持って触れてくることがございます。この和讃で言えば、一切の有碍、碍り有るもの。碍りあるものと言うと、あっ私のことだなと響いてくるわけです。

次が無碍光を歌っている。

清浄光明ならびなし  
遇斯光のゆへなれば  
一切の業繫ものぞこりぬ  
畢竟依を帰命せよ

ここでも一切の業繫ということは、私たちが身口意の三業、罪の縄に縛られている身だということそういことが言い当てられ、歌い上げられている。

次はですね、光炎王仏。

佛光照曜最第一  
光炎王佛となづけたり  
三途の黒闇ひらくなり  
大應供を帰命せよ



これも三途の黒闇ということについて地獄・餓鬼・畜生、暗き闇なりという風なですね。これも私のことではないと言えないような。そういうものの上に阿弥陀の光がくまなく用くと。大應供を帰命せよ。大應供は阿弥陀仏であるとそういう注をしておられます。

次の清浄光佛というのは、

道光明朗超絶せり

清浄光佛とまふすなり

ひとたび光照かふるもの

業垢をのぞき解脱をう

ここでも業垢という、罪業煩惱ありという。人間は罪業煩惱に悩むものである。そういうものの上に用く。阿弥陀の光に触れて、ああ罪業煩惱に悩んでおるのだということが知らされる。そしてそこから説かれている、光を生きる存在である。

慈光はるかにかふらしめ

ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ

大安慰を帰命せよ

これは歡喜光ですね。慈しみも光があらゆるものの上に照らして、その光の至るところには法喜。法喜というのは仏法に出遇って、本当に自覚をいただいて、信心を獲得した。そういう喜びが法喜ですね。法喜は命のある限り、どうですか。消えるものではない。もっと丁寧によれば、忘れても忘れても、消えても消えても、念仏を申すところ本願に触れる所、いつでも大悲の中に生きる。大いなる智慧に照らされて、尊い存在であるという。そういう法というところには存在の尊さですね。それに気付いている。煩惱の喜びはそうじゃないですよ。やっぱり快樂が貪られて、出来る時は嬉しいけど、できなくなるとひたむのですよね。なんとまあ不幸な運命だったなというところになってしまうということがあります。

それから次の智慧光佛。

無明の闇を破するゆへ

智慧光佛となづけたり

一切諸仏三乗衆

ともに嘆譽したまへり

無明の闇を破するという。そこに本当の阿弥陀の智慧の用きがあるという。一切諸仏三乗衆。三乗衆ということは注に声聞・縁覚・菩薩、これを三乗衆といふ。この仏を誉めとなえということが菩薩だけじゃなくして、声聞・縁覚・菩薩の上にも開かれてくると。これはもう大きな大いなる意味です。声聞・縁覚ということは特に依存性とか閉鎖性とかという問題を抱えておるわけですが、そういうものが破られる。超えられるという意味があるのですね。

それから次の不断光佛。

光明てらしてたへざれば

不断光佛となづけたり  
聞光力のゆへなれば  
心不断にて往生す

阿弥陀の光明は不断なのです。絶えることがない。聞光力について、弥陀の御誓ひを信じまひたするなりと。心不断ということにつきましては、弥陀の誓願を信ぜる心断えずして往生すとなり。  
次の難思光佛。

佛光測量なきゆへに  
難思光佛となづけたり  
諸佛は往生嘆じつつ  
弥陀の功德を稱ぜしむ

難思というのは人間の思いはからいを超えて用く光明の用きである。  
それから無称光佛。

神光の離相をとかざれば  
無称光佛となづけたり  
因光成佛のひかりをば  
諸佛の嘆ずるところなり

丁寧な索引があります。歌の意味につきましてははですね、二十二頁の下の二行目ですね。威神光明が形相を離れていることは言葉を以て説くことができぬから無称光仏という。この因光成仏の弥陀の光明は諸仏の讃嘆するところである。人間の計算とか知的な理解で量れるようなそういうものではない。そういうものを超えた、阿弥陀の用きである。

十二光仏の最後に超日月光。

光明月日に勝過して  
超日月光となづけたり  
釈迦嘆じてなをつきず  
無等等を帰命せよ

これの意味につきましては、光明がこの世の月日に超え勝れているので超日月光と号する。弥陀のその光明を釈迦が讃嘆してもなお説きつくせない。この無比の仏をたのめという。簡潔な歌の心というものを、名畑先生が注釈をしてくださっておりますので、ちょっと説明の所は、読みづらいかと思いましたが、コピーさせていただきました。

それは先程も申しました、私たちが「正信偈」の同朋奉讃でお勤めする時に、弥陀成仏のこのかたは、これ初めの和讃ですが、あと勤行集では五首の中に無量無辺光仏と無対光仏という、初めの五つの光が讃嘆されております。私たちがお勤めをして、阿弥陀の無碍の光明に触れるということが更に親しく感ずることができるということを思いまして、コピーをさせていただきました。

それからですね、光に遇うということは決して神秘的なことではなくて、真に自然な自ずからなる用きであるという風に思います。大石順教尼（おおいしじゅんきょうに）という方がおられまし

たが、若い時は祇園の芸子さんで、非常にモテた人で、恋敵が現れて痴話喧嘩になって、両腕を切られたのです。人間の愛欲というものは真に激しいものであります。それで、順教尼さんは悲嘆に暮れて、失意のどん底にあったのであります。

ある時、窓のところに鶯であったか雀であったか。小鳥が遊んでいる姿を見てね、ハッと気が付いた。小鳥には両腕がないではないかと。私は両腕を失ったということだけでもう世の終わりだと、地獄のどん底だという風に苦しみ悩んでおるけれども、その小鳥に教えられたわけです。両手はなくても生きられると。小鳥は現に生きておるではないか。気付くということはそういうことではないですか。平凡な事実が真理を語っていても気付かなければならないに等しいわけです。私はこの大石順教尼さんの体験には何かこう深い示唆というものを与えられるのです。

そういうことを教えられますと私たちの生活の周囲には自分自身に呼びかけ語りかけておるのが尽きないということがあるではありませんか。だからそこには自分自身が本当に開けるということが世界の環境が開けるという意味を、人生を開けるという意味を持っていると。だからこの十二光の讃嘆は、決して大袈裟な讃嘆じゃなくして、本当に実のある事実として深い感動を持って讃嘆されておるのである。そういうことに気が付くと、私たちは一切の群生、光照を蒙ると。光を受けて、光の中に生かされている身であるということをお教えされるとお思います。その時いかに光を遮っているものが私の中にあるかということが痛みとして教えられるということをお思うのであります。大変感動の一段であります。不十分でありますがお話のほうはこれで終わらせていただきたいとお思います。ありがとうございました。